

## 『熱源』

2020年02月07日

昨年1月に直木賞を受賞した真藤順丈氏の『宝島』は沖縄をテーマにした小説であった。米軍統治下、米軍施設の物資を奪う「戦果アギヤー」の若者たちが疾風のように駆け回るエネルギッシュな生き様を、米軍統治に対する彼らの思いに絡ませ、沖縄の具体的な歴史の中で描いていた。沖縄を知る上で、格好のエンターテインメント小説であった。

今年の1月に決まった直木賞は、川越宗一氏のアイヌをテーマにした『熱源』であった。北方領土問題はしばしば報道されるが、アイヌは新聞などで時々読む程度で、沖縄ほど身近ではない。知らなかったアイヌの人々が負った歴史と生活を興味津々と読んだ。

主人公はヤヨマネクフ、後に、日本名で山辺安之介と名乗った樺太(サハリン)生まれのアイヌ民族の青年である。アイヌは明治維新直後、北海道の原野に集団移住させられ、日本人になれとの同化教育を受ける。綺麗な女性に初恋、結婚し、子どもも得るが、妻はコレラで死亡。妻の死亡6年後、27歳の時、子どもを連れて、故郷の樺太に帰って来る。

もう一人の主人公はプロニスワフ・ピウスツキというリトアニア生まれのポーランド人青年である。ロシア皇帝暗殺未遂事件に巻き込まれ、15年の苦役流刑囚として樺太に送られ、苦難を体験する。樺太の少数民族ギリヤークと出会い、民俗学を志し、学会に認められる。彼は、民族に優劣をつけない思想を確立していく。樺太はアイヌ語、日本語、ロシア語、ポーランド語などが飛び交う多文化地域となっていた。そこで、強力な文明に飲み込まれないように、民族のアイデンティティを確保しようと、仲間たちと、アイヌ語の「識字教室」を作る。ヤヨマネクフは資金集めに協力する。プロニスワフはアイヌ女性と結婚し、2児を得る。ロシアは日露戦争に敗北し、国内の政治状況も不安定であった。そのような時、アイヌの民族調査に来たコヴァルスキから、プロニスワフの実弟ユゼフも闘っている祖国ポーランドの独立運動に参加するように説得される。人権を尊重する平和主義者の彼は暴力革命を嫌うが、妻と2児を樺太に残し、ヨーロッパに戻っていく。しかし、祖国はロシアに代わり、ドイツに支配され、望む独立には至らなかった。プロニスワフは学者として活躍するが、銃で撃たれ、樺太に残した妻と二人の子どもを目に浮かべ、もう一つの故郷・樺太を「熱源」、命の源であると言って、命を終える。

日本はロシアに勝利し、樺太の半分を得、多くの日本人が多く来るようになる。金田一京助がアイヌ語の研究に来て、アイヌの文化に心酔する。しかし、アイヌは「土人」と言われ、蔑まれる。白瀬轟中尉が南極点を目指す南極探検隊を編成し、ヤヨマネクフと友人のシシラトカが犬橇係として加わる。極点旅行は途中で断念するが、その時、ヤヨマネクフは「俺は南極に行く」と叫ぶ。「このまま帰っても元のまままだ。俺たちは無力に蔑まれ、憐れまれ、滅びると決めつけられる。」同行したシシラトカが「そのために死んでもいいのか」と言うと、「構わない。でないとアイヌが滅びる」と答える。アイヌを蔑んだ日本人を超えるぞという魂の叫びである。「著者」川越氏は、このシーンを下記のように書いている。「生きるための源は、人だ。人によって生じ、遺され、継がれていく。まだ絶えていないのだから。自分の生はまだ止まらない。熱が、まだ絶えていないのだから。灼けるような感覚が体に広がる。沸騰するような涙がこぼれる。熱い。確かにそう感じた。」

横暴な権力によって虐げられた人々はどこにでもいる。沖縄の若者たち、樺太のアイヌのヤヨマネクフ、ポーランド人のプロニスワフらがそうであった。しかし、いわば周辺に置かれていた彼らは自分自身の人生を果敢に勝ち取っていく。時流に流される今の日本人に、彼らから「喝」を入れられるような迫力ある壮大な歴史小説であった。